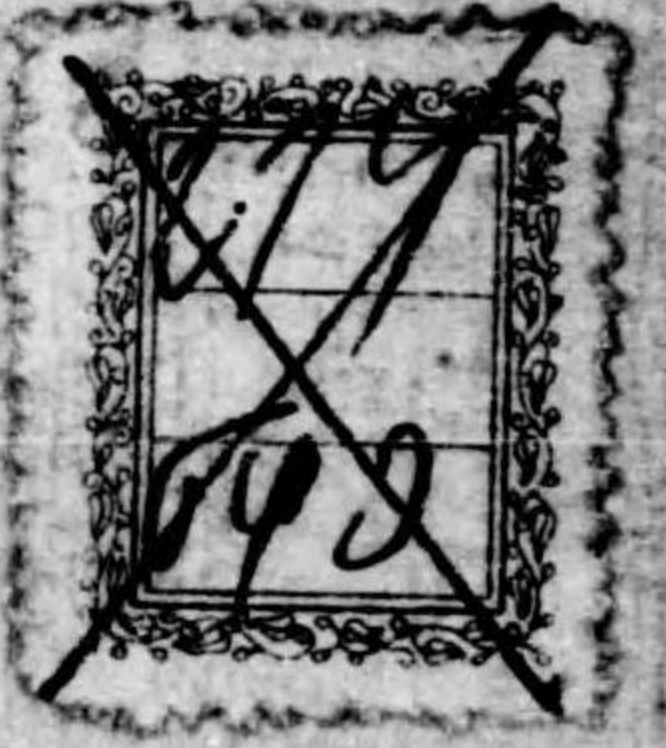


詩集  
はるよみかへる  
——  
松本福督著  
1918

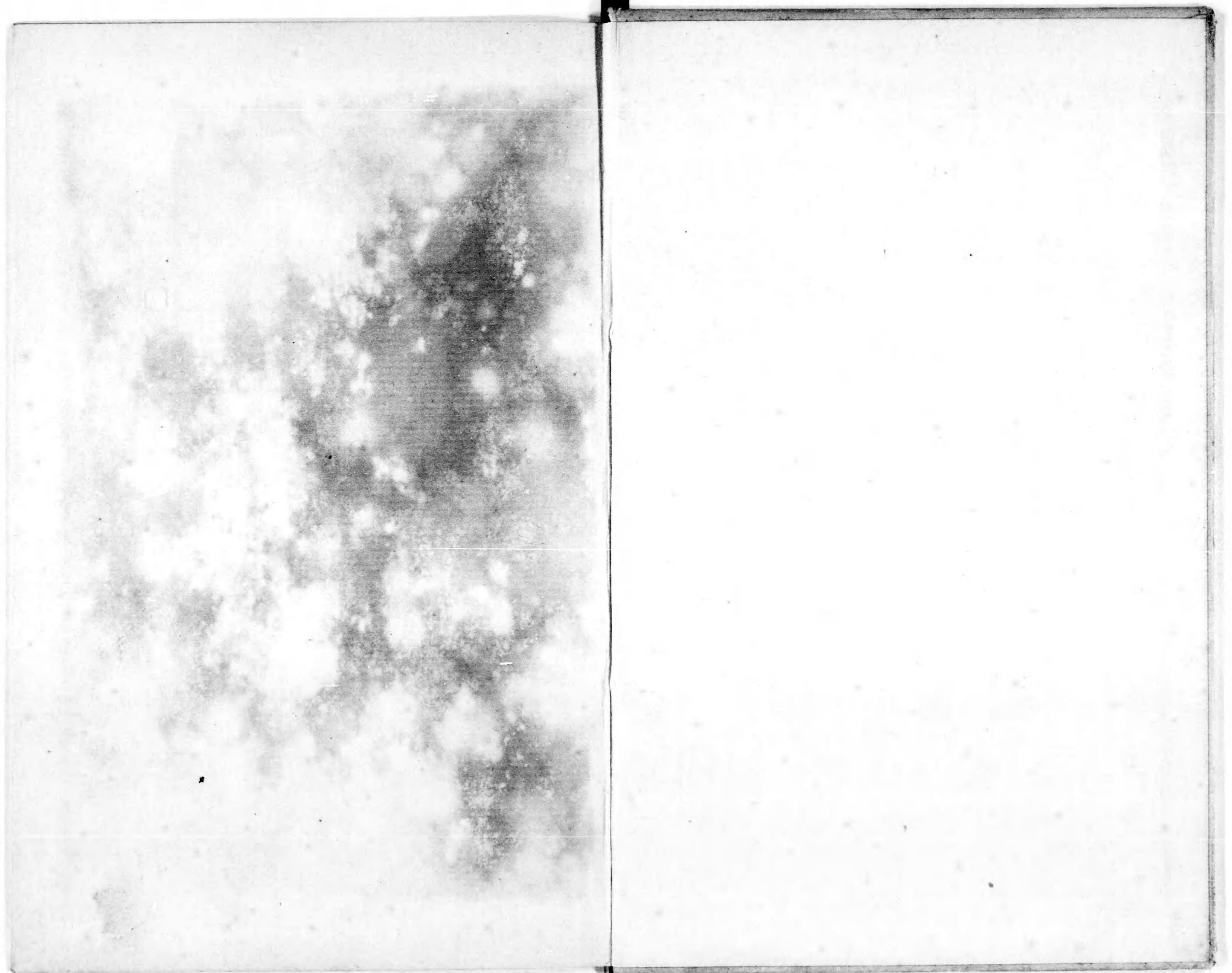


特



始





特103  
115



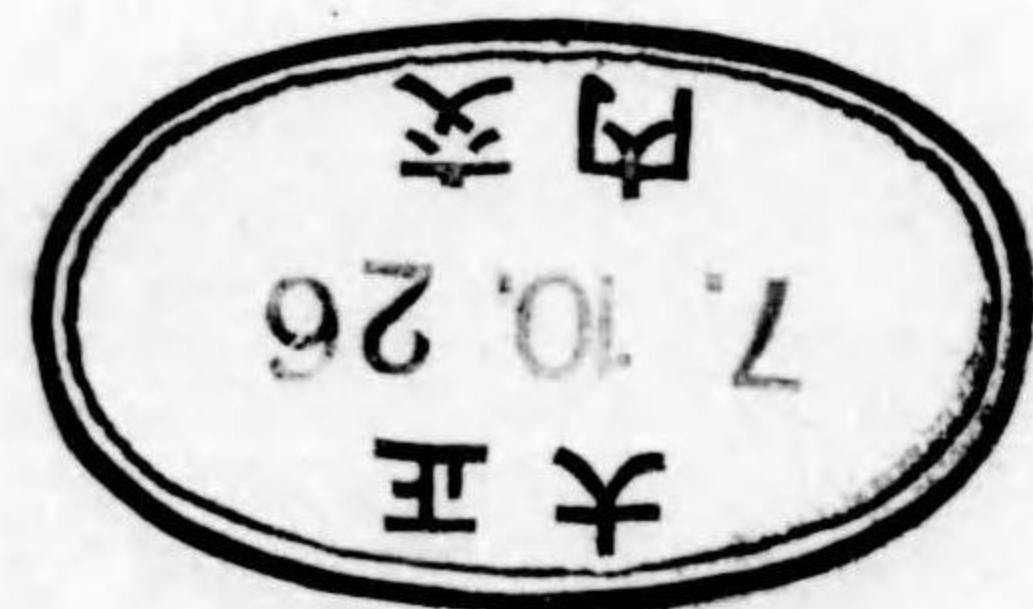
1918

1-9

\*  
\* \*

MCMXVIII

東 京  
曙 光 詩 社  
發 兌



## 序

松本福督君の詩集『はるはよみがへる』が出たことは私にとつても大きい欣びの一つだ。松本君が曙光詩社に入つて詩をつくり出してからまだやつと二年に満たぬ。然るに今もうこの一卷になつたものを見るに可成り立派な質量に富んでゐてその原稿をよむ間自分を心の底から驚かせた。松本君の詩の何よりもよいことはこゝだ。はりのないことだ。すこしも澁るところのないことだ。付

けたり誇張や、要らね脩辭や、また外部からの傳習思想を些しももたぬその感性の處ウイロジニテ女性にある。これらは松本君が詩に入つてからの道が誠に自由で、すこしも悪い詩壇の風潮に感染せず、その素地のまゝの情操をもつて鋭敏に自己とその周圍を感じ、見、歌つたからである。そのしなやかなセ<sub>ン</sub>チメントはあらゆる自己の印象に確實性をあたへ、また自由をあたへてゐる。一つ一つの句を透してその清純な感情の泉がはつきり見られる。私は詩壇の新人として松本君のこれらの作がたし

かに純潔な聲調をもつて何人の胸にも觸れるであらうここを疑はぬ。

詩人にとつて大切なことはやはりその人の稟性にある。あらゆるものを誠に感じ、見うる能力の有無にある。もしこゝに欠けてゐるならその人の聲は人生にとつて何の價值をもつけ加へはしない。かゝる詩人は永遠の詩の國土に旅券を持たぬ人である。幸に松本君はこの永遠の詩の國土を自由に濶歩し得る旅券の所持者である。私は心からこれを欣ぶ。

これらの詩はこの著者の胸に燃えてゐる『幻想の處女』に對する憧憬であり、熱き力この青春に對する頌歌であり、また自己の絶え間なき感情の音楽である。ひゞきのよい音色のなかに生の温かさを感得さす快い詩篇である。私はこの上にも松本君の成長を望んでゐる。

千九百十八年十月

川 路 柳 虹

はるはよみがへる

お月さま

1

おゝ 夕もやがいそいそと  
つめたいあらしといつしよに  
私のめぐりをとりまきます

東はうすあかくいろずんで

お月さま

お月さま

もう朝がきます

お月さまはいつかむかふの杜に  
しづんだのでせう

おつ月さま!

あいくるしい兎の瞳を思はすやうな

お月さま

そして氷のやうなお月さま

2

つるぎのあらしは

あの まるいそらから

あつたかにつつんだからだまで

ひびいてくる

こんなときです

私たち人間のきもつたまの

ちゝこほるのは

それでもちひさな魂は

びくびくとそのなかに

お月さま



お月さま

おそれながらもとめます  
 ……小さな幸福を

お月さま

あなたの光の氷るばかりのなかに

3

あなたのすきとほつた肉體

みあげてみると

私のこころはよみがへつてくる

ものうく眠つたからだへ

びしびしとつきさす刺のやう

外には霜が降つてまひります

今夜もまた

枝から振りおとされた木の葉が……

櫻やもみぢや白楊やすゝかけや

碧梧桐やの葉つばが

お月さま

お月さま

ちぢこほつたくろつちのうへに  
ひれふして あんなに  
じつとふるへてゐます

そしてあらゆる樹木の枝が  
静かなあらしを待つております

4

車馬のなやむ泥道も

こんなにしつかりしてゐます

夜になると

私のあるくたんびに  
せつたをひつばるたんびに  
その鋭い響が  
かがみのやうな大空にひびきます

5

街上にすこしばかりのお客をのせた電車が  
さみしいレールの上をすべります

お月さま

お月さま

街樹はむきだしのあらい手を  
 夜の空にさしのばしてゐます  
 そして その下を通るのが私です  
 お月さまはそのなかに  
 まつさをに  
 私の影をみつめてゐます

## 笛の憂愁

いつも私をふるさとの杜につれてゆく  
 笛の憂愁 夕ぐれあらしとともに  
 今宵もまた  
 ぎつじり閉ぢられた窓のすきから  
 絶え絶えにおとづれてきます

瞳ほそめに耳すまさせるこの憂愁

笛の憂愁

## 笛の憂愁

私の心はもう幼い繪卷の上を  
匂はしく追つてゐる

ペイヂ ペイヂのうつくしさよ  
なつかしいペイヂ ペイヂの追憶よ  
うつとり少年の心に私をさそひます  
落葉の層をふみしめて泣いた冬の丘の上  
路の塔を摘んだ丘の上 また  
夏の宵  
さわやかな七夕祭に記した戀の文

## 笛の憂愁

あゝ純なあこがれに瞳をみはつてゐた私の少  
年期よ  
あのころは私も無邪氣な少年  
そこにみるは幼き日の姿さまざま  
おゝいまも私を誘ふぬしなき笛の憂愁

## 幻想の處女

冬枯れの丘をまつ紅な夕日が落ちてゆく  
 處女のまつかな血のやうに  
 遠くへ地平へ落ちてゆく

一日の端に永遠をまつ少年よ  
 青春はいまも老いゆく あゝ  
 夜の樂園に楽しく歌ひなさい

幻想の處女はふつくらと腕をなげかけて歌ひ  
 ます

ヴェールはなやかにほほえみ兎のやうなふく  
 よかな頸は私に接吻をおびきます  
 私の情をよむやうにたまらないこびと理智に  
 光る眼よ 私はお前にくちづけます  
 とけるやうな唇と林檎のやうなプロフィールを  
 持ったすばらしい私の女よ

夕日の前に慕つてやまない私の幻想の處女よ

## 夜の女性

1

都會の華やかな夜の街衢には  
 若い女がおほせい居ることせう  
 異性の瞳をなつかしむ  
 娘や少女や少年が  
 どのやうに明るい舗石の上を慕ひますことか

2

そして小鳥の自由に浮ぶそれらの群は  
 いひやうもない一瞬のころよさに  
 あつたかい情を  
 男は女に女は男になげかけてゐることせう  
 かうしてなげかけられた瞳のたまゆらに  
 はなやかな都會の宵は開けてゆく  
 2  
 そこにはまた  
 甘い情調をささうカフェがある

## 夜の女性

レストランがある

エプロンの女はまたなう夜の心をみするもの  
 ここには甘きカッフエの香と

大理石の食卓におかれし西洋花の花弁のすが

すがしさ

またはリキユウルグラスにつがれし酒のひと  
 しづく

清く聖なるその色と匂ひと

銀にさゝめくナイフとフォクの舞踊

あゝそれをおもうさへ心のさびしきに

エプロンの女のもの云ひたげな瞳よ

## 3

いまは娘たちも

男を想つて寢床につくころです

そしてひとりさびしいふしごに

あひびきの夜のひとゝきをおもひだして

淋しく瞳をぬらしながら

両手をしつかとくみあはせ

胸のどろきと頬のうつくしさと

夜の女性

白い肌のしたをとほるはりきれる  
 血管の血潮のみなぎりをきいてゐるでせう  
 あゝはなやかなさびしい女性のうからよ

4

鳩のやうにふくらんだ可愛い胸に  
 十本の指をくみあはせ  
 なつかしい瞳をみはりながら  
 見知らぬ異性を慕つて未来の観會を  
 ゆめみてゐるやさしい高貴な女性を思ふと

私はいつも胸をうつものゝ影をみる  
 そしてあらゆる不浄なものは姿をたやし  
 私の進路のはなやかさに  
 強く強くやさしく生きよとさゝやく  
 しかし私の好きな女性はどこにゐる？  
 それを想ふことになぐさめらるゝ  
 幸福なさびしい少年の心よ……………  
 あゝ私の好きな女性はいまもどこにゐること  
 か……………



## 嵐の歌

梢を鳴らして土を氷らす嵐よ

青空

この大空のもとに

嶺から雪を吹き散らし高原の石つ原を吹き卷

つて枯芒をなげたほしてきた勇者

嵐

杜のかたかげに巢造つた村々の破け窓に

はげしい歌を投げ

雑木林につらく街並の電線に

勇者のひびきを傳へてきた嵐

勇者よ

そして今都の巷に砂を卷いてゐる嵐

お前の歌が街並樹の梢を渡ると

大人も少年もしつかり身装をかためて

氷ついた歩道をたつしやに進んでゆく

そしてお前の歌に合はせて

淋しいならば

## 淋しいならば

淋しいならば女よ

夕暮にきて歌ひなさい

高い山のあなたから

梢や丘を渡りながら旅してきた

青空の嵐

または

はてもないあの大海原をながれてきた

うしほの嵐とくるふ

私の庭で

夕暮來つて歌ひなさい

室には炭火がまつかに

とりちらされたあたりの暖かさ

淋しい私は待つてゐます

淋しいならば

## 希求の夜

うつとふしいなやめるころに  
 さわやかなほしのよるが  
 たかうたかうおごそかにおとづれてくる  
 かぎりなくはれたおほぞらを  
 かゝやくほしのつらなりに  
 あいしようのかげをほのかにみせて  
 わたしのききゆうのよるがくる

せきりようのうしほのとほなりに  
 さゝやくむねのためいきは  
 こごくのへやにもなつかしいじよせいを  
 もとめ  
 ちまたのはなやかさにつよくさびしくひとり  
 うたう

かゝみのやうにりんどうしたそらのもと  
 こごりのじゆふさにおよぐしよじよを  
 かふゆのあでやかさにあるくおみなをしたへ

## 希求の夜

るに

あいしよのかなしさは

あまぐものうつゆうのさびしさに

おもくおもくわたしにおしよせる

さはれそふあによるじよせい

こふひのしぶきかほりのさびしさに

ほゝあからめてあいれんのせつなさになく

げんさうのしよじよをこのばゝ

あいしよのあはきよろこびに

よにもうつくこいまごころをわたしはささげ  
ます

よしひとりさびしくうたふことのたよりなさ  
も

よになつかしいじよせいのかうきなうなちに  
はうえうのこころよさをおもへば  
つよくあこがるるこころのすなほさよ

## 希求の夜

はるはよみがへる

はるはよみがへる

ひからびた地上のあらゆるものから  
 冬の寂しさと冷たさをぬぐひおとして  
 水のせらぐ溪のほとりから  
 ほのぼのと春はよみがへつてくる

卵黄色に丘や野の黒土のうへを

おし被さつてゐた芝生は

こころよい春のめぐみにあたためられて  
 もうせんやうにふつくらとふくらむでゐる  
 小さな若芽ははつはつ青く呼吸づいて  
 林や畑のぬくもりに  
 その仇けないすがたをのぞかせて  
 云ひやうもない香の漲ぎる大氣を吸つてゐる  
 心をねむたく誘ふ芝生のあたたかさ  
 ねころんで光のもたらしめてくる貢をうけてゐる  
 るのはなんと云ふたのしさだらう

はるはよみがへる

はるはよみがへる

みよ！

びよびよびよごこの空で雲雀が鳴いてゐる  
日はかがやいて空は青い

その下に遠く麥畑が平行につづいてづつと農

夫は快く晝飯をしてゐやう

すきかへされた畑土は

黒黒と水氣だつて心いつぱい光を吸ふ

こころよさに酔つてゐるだらう

蛙はひよつこり麥の畑から

外光のあかるさにおびき出されて

黒土の上をびんびんおどつてゐやう

すべての光はめまぐるしく芝生の私をおそつ

てたまらない香氣に幻想のふしぎさを思は

せる

おゝたまらない もう私は日光に酔ひさうだ

もう私にはかなしい心の傷手もなんにもない

すべてが愛に充ちてゐる

はるはよみがへる

天地の愛

はるはよみがへる

すべては自然の力でよくなり  
 田に働く百姓も街にさまやうのものも  
 丘に遊ぶものも道ゆくものも  
 みんな春の恵にそのかやく光にぬれてゐる  
 活動だ 生の苦痛を打ち凌ぐ力だ 醜のなか  
 の美

おゝ私は新生しなくてはならない

過ぎし日の世の友よ

昨日の私を今日のまことの私と思ひたもふな  
 春が冬の装をぬぎすてたやうに  
 ふしだらなみにくい私の生活は  
 この自然の愛にめざめたのだ  
 世のすべてをすてゝたゞ一の愛に生きたのだ  
 私の心は馬のやうにかける  
 昨日を忘れて新しい道程をめがける  
 誰でもこい 私はみんなの強い抱擁と接吻と  
 恍惚に酔はふ そしてすべてに幸あれと  
 両手をさゝげてこの光のなかにひとり歌ふ

はるはよみがへる

さくらのたより

さくらのたより

窓の前の並樹を吹きわたる風の威力  
 残りの冬の吹きながされて  
 新しい生き生きした  
 しかし恵まれた春の甦へつてくるのをささる  
 家々の屋根をゆるがし  
 並樹の梢を吹きまくるこの風の力を知り  
 やがて寂しくあそをとめてゐる冬の

きつぱり別れてゆくのをおもふ  
 そして風のむごたらしく吹きさつた後に  
 静かな静かな晴天のつゞくのを知つてゐる  
 暖い風は野のはしから  
 都へをとづれて  
 春の心に新芽をほころばせ  
 若芽のはつはつのはつを感ずる  
 そしてさわやかに太陽のかつやく  
 空のもとに

さくらのたより



さくらのたより

青い麥の畑がつとき

哀音の唄につれて

耕作車はのどかに曳かれてゆくのを知り

蛙は黒土に日光を吸ひ

雲雀は空にかゝやき

どこかで櫻の便りを耳にする

三月末の風は寒いけれど

さくらの香はそのへんにするやうだ

## 高臺の窓から

高臺の私の窓から

夜半すぎの街の眠りをながめてみると

家々の窓はひっそりとかすかに光はもれ

青白く晴れ渡つた空に

春先きなれば冷たくちらついてゐる

丘の樹立はおほごかに

深海の孤島のつらなりのやう

高臺の窓から

## 高臺の窓から

樹立のはづれに浮ぶ灯は  
いさり火の影のやうに  
冷めたくおぼろにづつとつづいてゐる

うつくしいよる

あゝあの丘の家に眠つてゐる女性の簇よ  
はなやかにやさしくおんみらは

このうつくしい夜のこゝろにつゝまれて  
眠つてゐやう

だが慕ふおんみらの愛人は

## 高臺の窓から

ねつかれぬまゝに  
夜のさわやかな月の光に  
おん身と別るゝときに交す  
あつい燃えるやうな握手と  
にこやかな微笑とおもひだして  
ひとりゐるものたらぬ心の空虚に  
しみじみさびしさを味つてゐやう  
そして窓のそとにしのびよる  
よき歌のはのめきを聞くであらう

ここのおんりつ

ここのおんりつ

しづかなよる

さびしいこゝろにここのねいろをきく

よわくやさしいここのねのおんりつのさびし

さよ

こどくのこゝろをくもらせるねいろにせまる

よるのをどはかなしい

はなのほふをがにつかれてきた

けだるいからだのこゝろのなきがらに  
なげかけらるゝここのねいろ  
こどくのさびしさに

ついをくのゑまきをたどるわれはさびしい

かよわいせうねんのひに

きいたおんみのすさびのこと

ごのやうなあこがれにわたしは

むねをどいろかせてきていてゐたことか

ここのおんりつ

ここのぬんりつ

いまつめたいあきらかなほしのそらを  
わたつてをどづれてくるここのねいろに  
こごくのわびしいすがたをいとひ

せうねんのひの

あはいついをくのなみだにうなだれる

こみあげてくるせつないこごくの

うらぶれしたよりなさは

ここのねいろにさびしむよりも

さびしくいきることのあはれさになげかけし

あいしようなのかげにわれはなく

## 煙草と雨

煙草のけむりむらさきに漂よひ

室はほんのりあせばんでゐる

上氣したわかい頬をあつめながら

詩を語るわたしはうれしい

ほつと上氣したのがよいのではない

おたがひのこゝろが雨のやうにとけあつて

煙草と雨

## 煙草と雨

むら／＼とたばこのけむりの漂ひのうちに  
 あつたかい愛情がながれてゐるなかにゐるの  
 がたのしい  
 だまつてゐても  
 おたがいにわかつてゐる  
 じつとだまつておたがいの瞳をみつめてゐる  
 とどこからか幸福がやつてくる

そして遠い杜から

雨のをとがちかづいて

## 煙草と雨

しづかにやんはりところの庭までおとづれて  
 くる  
 じつときいてゐると  
 私の心はもう雨とものがたつてゐるらしい  
 ぽつ／＼軒をうつ  
 あまだれの美しく……  
 月のないまよなかをおだやかな  
 室はほんのり汗ばんでゐる

## 友に與ふる言葉

おだやかなこの夜にはじめてみいだした  
 まこと美しくしい人の魂のひとよきの心よさに  
 私は涙ぐましい心にぬかづいて  
 かぎりないよろこびに このおほきな感激の  
 うるはしさに この美しくしい魂のまごころを  
 大手をひろげてつよくつよく私はうけいれる  
 孤獨の寂しさにちいさく畏縮してゐた

私の情は いま雨のやうにすなほにとけあふ  
 人の魂と私の情の私話をじつときいて居る  
 そのもつともうつくしい友情  
 やさしいすこやかな愛情は ながれくいて  
 今 まつたく私のものとなつた  
 あ この魂のさゝやく音楽  
 さう こゝにさびしい私たち孤獨の心はとけ  
 あつた なんとたのしい夜だ  
 私の心はめいつて人の魂をじつとみつめる  
 そのひとよきのつよさ その韻律のすこやかさ

## 友に與ふる言葉

いまはまつたくすくはれた  
 さびしいまこと開放された人の魂  
 あ この若さでそしてこの美しくしきで進まう

私たちの進路には險岨な山がある 深い溪  
 がある ひろくどはでもない海原が眞碧の  
 波のこゝろよさにひるがへる  
 そしてそのはてには碧い碧い空がある  
 また山のしたには荒れ狂ふ激流が岩石の溪谷  
 にうづまいてゐる その彼岸には私たちの苦

## 友に與ふる言葉

しむ心をなぐさめてくれる まことたのしい  
 花園がひらかれてゐる  
 私たちはまづ美しいこゝろで そのけはし  
 い山にのぼろう  
 それはまこと苦しい涙 しかし一步すゝむた  
 びに ひどあしのぼるたびに 私たちのふり  
 すてゝきた なつかしい故郷の思ひ出が  
 野や畑やそれにつづく杜とともに かすかに  
 かすかにみわたすことができる  
 いま私たちは過去すべてをすてゝ山にのぼ

## 友に與ふる言葉

る　ひとあし苦しむごとに眼界がひらけ　さ  
 まぐのこゝろよさをみせてくれる  
 このはてしないやまなみのはてにつといて  
 青い空が　づつとふるさとの杜につとく  
 思ひ出はなつかしい　されどさびしい  
 私たちは過去をかへりみていま新しい道程に  
 のぼる

そして世にも美しい人の魂のとけあつた友情  
 をもつて　このけはしい人生のはてに旅立つ  
 一人あるときも寂しくはない　二人あると

きも淋しくはない　私たちはいつも友情と  
 もにある

あゝなんとたのしい私たちの心であるか  
 私はたかく／＼かひなをさしあげて

この青空に思ふさま大聲に歌ふ　そしてこの  
 さはやかなしかしくるしい　山のぼりの心を  
 歌ふ　そしてその歌聲ははなやかにつよくた  
 かく　この青空のはてへながれてゆく

それでも私たちの歌聲は決して消えない  
 たれかゞそれを聞えてくれる

## 友に與ふる言葉



## 友に與ふる言葉

お 友よ 私たちはいつも孤獨だ しかし  
 いつも私たちはともにゐる その心はいつも  
 海のやうだ 夕べの潮騒があるとも 深海の  
 底には静かな大ききがある それはまこと愛  
 人生を愛しぬいだ 愛のながれた  
 この山嶺にのぼつたこゝろよさはごうだ し  
 かしこれもひとゝきだ  
 みよ ふるさとの杜や畑や思ひ出や小川のせ  
 ららぎは聞くことはできない たゞ私たちの  
 前方には深いく浮雲がたれこめてゐる そ

れをおしきつて麓にくだらねばならない 山  
 をのぼる苦しさは汗をながすことによつてつ  
 くなはれる

しかし友よ

山をくだるには心せなければならぬ そこ  
 にはおそろしい岩石の峠や板のやうにみが  
 れた阪がある そしてそのしたには眼のと  
 かないふかいく溪谷がある そこにおちて  
 はならない

私たちはたすけあつてブツダハのめぐみに

## 友に與ふる言葉

## 友に與ふる言葉

はなやかな山嶺の眺望をおはないで 一步一歩確實に岩石と岩石とのあひだにわずかに通つてゐる 世のえらばれた人のみまれにとほる 純一な路をまつすぐにたごらなければならぬ そして友情のまごゝろに耳をすまさせながら 心におのゝく恐怖のさびしさと世のやからの呪のあさましいうたごえを勇ましくきゝすてゝ純眞に阪をくだる

そこにはまた速急な溪流がある

あ 友よ どうして私たちは花園のひらけて

ゐる彼岸にわたることか まだ人の渡つたことのない溪流 昔から今までたえず人の音づれをまちながら水はさやくせゝらいでやまなかつた

この幽靜な音樂に耳を澄ませ  
 岩石に激する水流のしぶき 水のこゝろよさ  
 なんとたのしいことか 黙つてきいてゐやう  
 お たまらない 水のせゝらぎ しぶきのゐ  
 んりつ

私たちの友情はとけあつてゐる 時は水の

## 友に與ふる言葉

## 友に與ふる言葉

やうになかれてやまないけれど 私たちの心  
 はかたくくどけあふのだ ブツダハ淺瀬を  
 よぎるこの人生の旅人をまもれよ すがるも  
 のよくめぐまれる この水のさやくなかを  
 さわやかにこゝろよく 彼岸に光る 幸福  
 な花園にゆくのだ

そこには畑についで美しい花園がある  
 私たちはこゝに少しやすむ 海の上に船を浮  
 べるまへに 花園の芳香たゞやうまなかに

## 友に與ふる言葉

畑のみのりの唄をきながら たのしくすこ  
 やかにやすもう あ 花園のたのしさよ  
 堇は可愛ゆく新しい香になよく咲いてる  
 る 遠く菜種の咲きそらふはてにびよくと  
 雲雀が空に昇つてゐる お 恵まれた春  
 魂は花園のかげにかくれて眠つてゐる  
 なんといふ静かさ のごかさ あ たまらな  
 い 私の魂は花の香氣のこゝろよさに眠つて  
 ゐる 友よ心して私の魂をにぎつてゐてくれ  
 たまひ 私の懐をのがれて 君の心をはなれ

友に與ふる言葉

てひとり花の蔭を慕つてゆくらしい  
 だが花が咲かうと風が吹かうとおたがひにと  
 けあつたまこと心の心ははなれない  
 やがてかなたにひろくどひらけた海に船を  
 浮べやう 風は荒くとも浪は高くとも私たち  
 の船は希望をまことにしてもよひをどく  
 かうして人生の寂しい旅人は新しい旅に登る  
 あゝ友よ 私たちの道程は新しく長い  
 そして苦しみと楽しさはともにまつてゐる  
 さあ友よ私達はすゝまなくてはならない

## 日没頌歌

晴れた空

紅く色彩る日没の夕光り

あ 笑ひ狂めく日没よ

爾の熱は私の感情

爾の光は私の想像力

爾の轉り狂めく力こそまこと私の思想

あ おん身夕日よ

日没頌歌

## 日没頌歌

爾こそ私のまことの姿  
最後の私のほんとうのもの

爾に逢ふために私はこゝに來た

そしてこの草原のはてに

今日のおほりを雲雀の歌ふこの丘で

爾のまこと尊い姿に逢つた

あ この眞紅に轉り狂めく大きな力  
その熱と光

私のいつもみてゐたもの

そして逢はなかつたこの姿

この魂

あ 生れて今日の日までいつも慕つて

逢はなかつた爾

爾こそ訪ねてやまなかつた心のふるさと

心の父母

ごのやうに あゝ

そしてこの子が逢ひたがつてゐたことだらう

## 日没頌歌

## 日没頌歌

爾の轉廻してやまない狂ふやうな自力  
 そしていつも自分の軌道を  
 偉大な足ざりに微笑してゐるその力  
 あ その自らの力こそ私の思想

私のいまの思想をおしひろげていつたとき  
 あ おんみ夕日の笑ひ狂めく姿  
 そしてあついく  
 萬物を焼いてやまない  
 この狂熱的なしかも自らもえてやまないこの

## 熱情こそ

私の求めてやまないもの

いまの私はあまりに柔和によわくしい  
 そして私の想像力はあまりに淺く貧しい

あ 爾の光こそ偉大なもの  
 世界のどのはてにある深林をも  
 海の底をもみどうしてくれるおんみの光  
 あ この光のつよさ

## 日没頌歌

## 日没頌歌

この光にあたるすべてのものゝ  
その秘密なもの神祕なものすべてあらはれる

あ 爾日没の夕光り

おんみの光こそまこと私の想像力

爾の光を得たとき

私は自然界の科学の神祕を見透さう

そして爾の力と熱と光とをかねそなへたとき

この宇宙から不思議な

科学をみせてやらう

私の友よ世の人々よ

あ 私の魂を體現してゐる爾日没よ

日没の夕光り

## 日没頌歌

私自身になり切らう

### 私自身になり切らう

私がちつとのまねむつてゐたのに  
 私のコヒトとはあゆみさつた  
 夕日をあびて松の木の間  
 白い洋傘をひきながら  
 私の戀人はあゆみさつた  
 ゆるやかに丘を形す五月の原を  
 私の戀人はあゆみさつた

私はいまゝでよくも嘆いたもの  
 琴の音色笛の哀れさに  
 私はよくもあんなに嘆いたもの  
 僅の悲しさにも涙をながした

そんなことではいけません  
 もつと強くおなり  
 私の可愛ひとがよくいひました

それも今は昔のこと

私自身になり切らう



私自身になり切らう

夕日のはなやかさに

ちよつとのまねむつてゐたのに

私の戀人はあゆみさつた

あゆみさるものは追はないで

私自身で生きてゆかう

みよこの丘に立つ樹々を

夕日を一樣にあびて

そよ風に吹かれてはゐるが  
一本々はひとり切りだ  
あまりに松はひとり切りだ  
私もあまりに私自身になり切らう  
人におかされないで  
私のものでなり切らう

晴れた空

西に夕日がくるめいてゐる

私自身になり切らう

私自身になり切らう

感情のするごと

闇のなかゝら玉をさがし出す不思議な力と

ふかいく思想の泉こそ

あこがれてやまない私自身のあらはれ

木は木自身

私は私自身になり切らう

立てば長い影が草にひく

私自身のまことのすがた

すつきりした影ながら

まじりけのないそのまゝのすがた

この姿で進まう この魂で この純潔で進ま  
う

私の着てゐる衣服は多様だ

重たすぎる

思想の外皮 感傷の安慰 貧しい想像力

あ このみえの衣を脱いで素裸になれ

私自身になり切らう

私自身になり切らう

そしてこの木とこの丘と  
この草と、もにおごらう

夕日がまづかに笑つてゐる

そしてやがて西の空からおりてきて

それがほんとうだと夕日が叫ぶ

梢はそよいで木はさゝやいてゐる

みいるものすべて素裸でおどつてゐる

影のみまことの私をみせてくれる

感情も思想もみんな一様のいろにみせてくれ

る

そのなかゝらほんとうの私をみせてくれるもの

よ

まづしいながらも私をみえてくれるものよ

あ まちたまひ

今に素裸になつてみせる

そしてあまりに私自身になつてみせる

私自身になり切らう

私自身になり切らう

あ そのときは太陽とともにおごらう  
 このひろつばの自然のなかで  
 この大氣のわきたつさなかで  
 夕日をあびてともにおごらう  
 影はながく草にひいて  
 自然はいつも私をすなほにしてくれる

### しかしお互にあつたとき

私の愛するものはどこかに待つてゐる  
 春の朝に月の夕べに  
 私の訪ねてゆくのを門邊に待つてゐる  
 さうして逢へないさびしさに  
 ひどり寂しく慕ふものゝ歌を唱つてゐやう

それはどんなにやさしい女性であらう  
 しかしお互にあつたとき

しかしお互にあつたとき

黒のぬれ髪 ぱつちりした瞳

どこかさびしみのある可愛眼もと

それが私の心にむくかごうかわからない

私が慕ふ者の氣にいるかごうかわからない

しかしお互に逢つたとき

さも生れながらに愛しあつてゐたかのやうに

抱きつくことだらう

ちいさひときから知りあつてゐたかのやうに

すぐ純真なお友だちになることでせう

私はいつもどこかに

このさびしいしかし幸福な想を秘めながら  
夜がくると散歩にでる

そして若い女たちに逢ふと

それが處女であるかごうかをみわけ

さうしてそれが處女でなかつたときは

どのやうにさびしい想をすることだらう

その女がどのやうにみする眼をもつて

しかしお互にあつたとき

しかしお互にあつたとき

しなやかな姿をもつてゐやうとも  
私はきつとさびしい想をする

そして私のものであるはずの

處女の來るのを待つてゐる

そして逢ひなひでさびしい心を抱きながら

寒い風の吹きまく夜も

暖い風の吹く夜も疲れたからだをひいて

明るい舗石の上から

くらい静かな私の室へもどつてくる

あ私の好きな女性はごこに  
私をまつてゐてくれるでせう

しかしお互にあつたとき

友は仕事に燃えて苦むである

## 友は仕事に燃えて苦むである

あゝ さわやかな朝なれど  
 大空垂れさがり  
 生の苦しみと悦ばしさは  
 かなたの街からひゞいてくる  
 がらんと女氣のなひ室に  
 樹木の緑を吸ひ樹木のゝびやうをみてゐると  
 自分の姿がさみしくなる

そして世の苦しむものゝ生活と思ふと  
 自分の心はくらくなるが  
 生の苦しみに戦ふもの  
 そして雄々しくうち勝つものは  
 いまの私には幸福にみえる  
 とうとうしてさう同情がそして涙が  
 とうとうして手をとりあふことができないのだら  
 う  
 私の友は極度にくるしむで  
 極度に勇むである

友は仕事に燃えて苦むである

友は仕事に燃えて苦むでゐる

その心は私にもわかるやうだが  
 どうしてもつと深くふれあふことが出来ない  
 のだらう

友の家を訪ねてみると

明るく室をかざつてゐるが

どこかに暗い豫感がたゞやうて

たつた 一人の祖母は死の床にちかづき

友は仕事に燃えて苦むでゐる

そして詩に勇んで極度に貧しさうだ

しかし祖母にそそぐ愛情の流れ

そのゆかしい友の心根のをこなひをみるとき

私からなんと幸福にひたつてみえることか

どうしてさう同情がもてないのか

いまもその友から純な二つの詩が来た

このなづまない純な友の心

あゝ どうしてこうむごたらしい生に苦しむ

のだらう

友の容貌は小兒のやうにかゞやいてゐるが

あごひげはさみしさうで

家には死にちかづく死の床が……………

友は仕事に燃えて苦むでゐる



友は仕事に燃えて苦むでゐる

あゝ 友よ君が丘にねころぶとき  
 どのやうに垂れた空を  
 どのやうにそよぐ木の葉を  
 どのやうに巷の生活を……  
 それを思ふときいつも私ははづかしくなる  
 苦しむもの さう  
 ほんとうに苦しむものはしやべらない  
 無知でゐる  
 さうしてほんとうにわかつてゐる  
 あゝ 友よ苦むでくれ

やがて勝利がみえる  
 祖母は安らかな死に  
 そして君自ら安心してくれ  
 そこに眞の愛まことの生活がある  
 すべての根本はそこにある

友は仕事に燃えて苦むでゐる

闇の空から地をうつ雨

## 闇の空から地をうつ雨

闇の空から地をうつ

梢をつたつて葉裏にをちる

窓にしのびよるつゆの雨です

そして心快くはぢけるやうに軒をつたはる

生きくくと大地をうつてくれる

暗い空からまつすぐにをちてくれる

室に聞いてゐるとたまらない夜の雨です

庭にをりて素裸でをごりたい  
 そして子供の純真にかへりたい  
 窓にしのびよるつゆの雨です

闇の空から地をうつ雨

## 歸省日記

A

田舎にめづらしい電氣のもとで  
弟たちとはなしてゐると

しづかな幸福はすなほな家庭にも生れてくる

小さな弟の眞顔のおどけやうは

みんなの人たちに快い笑顔をむけさせ

ほんどにゆるやかなほゝゑみは電氣のもとに

あふれてみえる

なんとたのしさうな小さな弟の子守唄よ

一人の弟と妹はつゝましさうに

かしこまつてゐるが

ねんねころろ——子守唄きくときは

さもくづれるやうになつかしい笑がこぼれる

久しぶりでこのめぐまれた

團欒に唱和する心よるこぼしさを

じつと瞳をみはつてこの幸福を私ほうけてゐ

る

こんなに年のへだつた弟たちをなつかしき  
 家庭の人々とうれしく話すのは  
 祖父さんの亡くなつたあとめづらしい  
 父は忙しさのあまり  
 私の歸省に心を得てとびまわり  
 女たちはさびしさうにしてゐるが  
 今宵はまつたくあかるい氣分にひたつてゐる  
 そしてこぼれるやうな笑が  
 これからもなつかしいよろこばしさに

私の家庭はめぐまれるだらう  
 あゝなんとなつかしい弟たちの  
 かゝやく瞳のさはやかさだらう

B

私の望むは一盃の酒  
 星をたらしめたやうな一盃の酒  
 一盃一盃また一盃  
 唇ふるごとにすつとする  
 あこがるゝ心をさすやうな一盃の酒こそほし

けれ

私はらんまんと花のやう

心ゆくまで酔つてゐる

その間に忍びこむ

酔狂の亂舞かつぽれ踊

身うちつかるゝまでのうつとうしさ

何を讀んでも眼につかない

何を聞いても氣に入らない

すべては倦怠の極

さはれしたゝりおつる星の雫こそほしけれ

## 希望は遙かに

朝の戸のすきまから明るい日光がながれこむ

と

鈴懸のしたで

にこやかな光に濡れながら

いつもそこの空地で少女らは

可愛歌を唱ひます

希望は遙かに

柱にもたれながら

休み日ののどかな朝だと

私は窓から空をながめます

ゆつたりおちついたきぶんに

碧い秋空をながめてゐると

ほゝえみはつゝましく野人の頬にもものぼりま  
す

街の屋根は静かに

空は遠く晴れて私の希望は遙かです

## 阪と私

A

私はいつも微笑して

はるかに路の端の木端を

静かな空を

街巷の蔓の上にみながら

かるい足ごりに阪を下りてはまた上る

阪と私

夕空が眞紅に彩ると  
 私は寂しい心に夕日の華やかさを  
 遠い丘の草に沈ちてゆくさびしさを  
 夢のやうに慕ひながら  
 小兒の心に夜の食卓を思ひ浮べて  
 すなほな微笑に心足らひ  
 かるい足ざりて下りてはまた上る阪だ

## B

任事の話に興奮して  
 軽く酒に酔つた額を微風になぶらせながらこ  
 の阪にくると  
 すべてのものは私に親しい情をおこさせる  
 そしてゆるやかな阪のふもとに  
 じつと静まつてゐる廣い葉並の行路樹  
 ぼんやり浮んでゐる赤い灯などが  
 静かな池のやうな氣持がする

## 阪さ私

そこに立つてゐる人形のお巡りさんに  
 軽い挨拶してまたのぼつてゆくと  
 明るい星くづはしたたるやうに  
 大空から靄を透して  
 寂しい私の心をゆすつてくれる  
 そのやさしい心持は微笑にとけこんで  
 明日の任事のすばらしさに燃えて  
 下りてはまたのぼる阪だ

## C

戀人ごゝもにあゆむやうに  
 しせんと口笛を鳴らしたくなるこの阪は  
 いつもすなほなことをわたしに教へてくれる

星のないよる

暗い空から静かな歌が

行路樹にさゝやくとき

私はよく酒に酔ひながら

阪さ私



## 阪と私

長髪を風になびかせて  
 足音かるくおりてくる  
 戀人と共にあゆむやうに  
 静かな心であゆまう  
 さわやかな風は  
 阪の上から阪の下に  
 かるい足ざりにおりてくる  
 私はいつもやさしい氣持に  
 鈴懸の葉裏を見ながらおりてはまたのぼるこ  
 の阪だ

## 雨と私

日なか雨戸を閉ぢて  
 蠟燭をともせば  
 火はじいじいと燃え  
 雨はしとどしどしと  
 街の藁をぬらして  
 私の窓のてすりにも  
 雫したゝりておちる

## 雨と私

なやましい心に  
 蠟燭の灯みてあれば  
 みにくい姿に  
 片戀の面やつれて  
 雨はしとしと  
 かなしいからだをとりまひて  
 さびしい心に降つてくる

## 虫と私

雨のはれぬまを月の出ぬまを  
 蟲は星のまたゝきに  
 あきらかな露にぬれながら  
 秋の夜を心ゆくまで啼わてゐる  
 さびしい人生の巡禮は  
 ふかくたれこめた室にゐて  
 秋を啼く蟲の心に通ふてゐる

## 虫と私

雨露にぬれながら

たゞ啼くことのよろこばしさを

蠟燭の消えあしはやきに

耳をそばたてながら聞いてゐる

眼に見えない不思議な扉

内に入れよといふけれど

私たちはたゞその面に小さな掌を印こしたば

かりだ人生は

あゝ蟲はきよらかな星の雫を見上げながら

狭い家々の合ひ間からも

秋の夜を心ゆくまで歌つてゐる

されど淋しい私の人生よ

翼を失つて草むらに落ちこんだ虫のやうに

生活の倦怠にうなだるゝ私の魂

あゝ

幻に星は一つ殖え二つ殖え

窓の外には雨はれあがりてかるやかな秋が

あほそらたかく肥えて音づれてゐる

## 虫と私

目次

お月さま……………(三)  
笛の憂愁……………(二)  
幻想の處女……………(一四)  
夜の女性……………(一六)  
嵐の歌……………(二三)  
淋しいならば……………(二四)  
きょゆうのよる……………(二六)

目次

## 目次

はるはよみがへる……………	(二八)
さくらのたより……………	(三六)
高臺の窓から……………	(三九)
ことのゐんりつ……………	(四二)
煙草と雨……………	(四五)
友に與ふる言葉……………	(四八)
日没頌歌……………	(六一)
私自身になり切らう……………	(六六)
しかしお互にあつたとき……………	(七六)
友は仕事に燃えて苦むでゐる……………	(八二)

## 目次

闇の空から地をうつ雨……………	(八八)
歸省日記……………	(九〇)
希望は遙かに……………	(九五)
阪と私……………	(九七)
雨と私……………	(一〇三)
虫と私……………	(一〇五)

大正七年十月廿二日印刷  
大正七年十月廿五日發行

定價金壹圓

詩集  
はるよみかへる

不許  
複製

著作兼  
發行者

松本福督

印刷者

弓山靜身

東京市神田區雉子町卅二番地

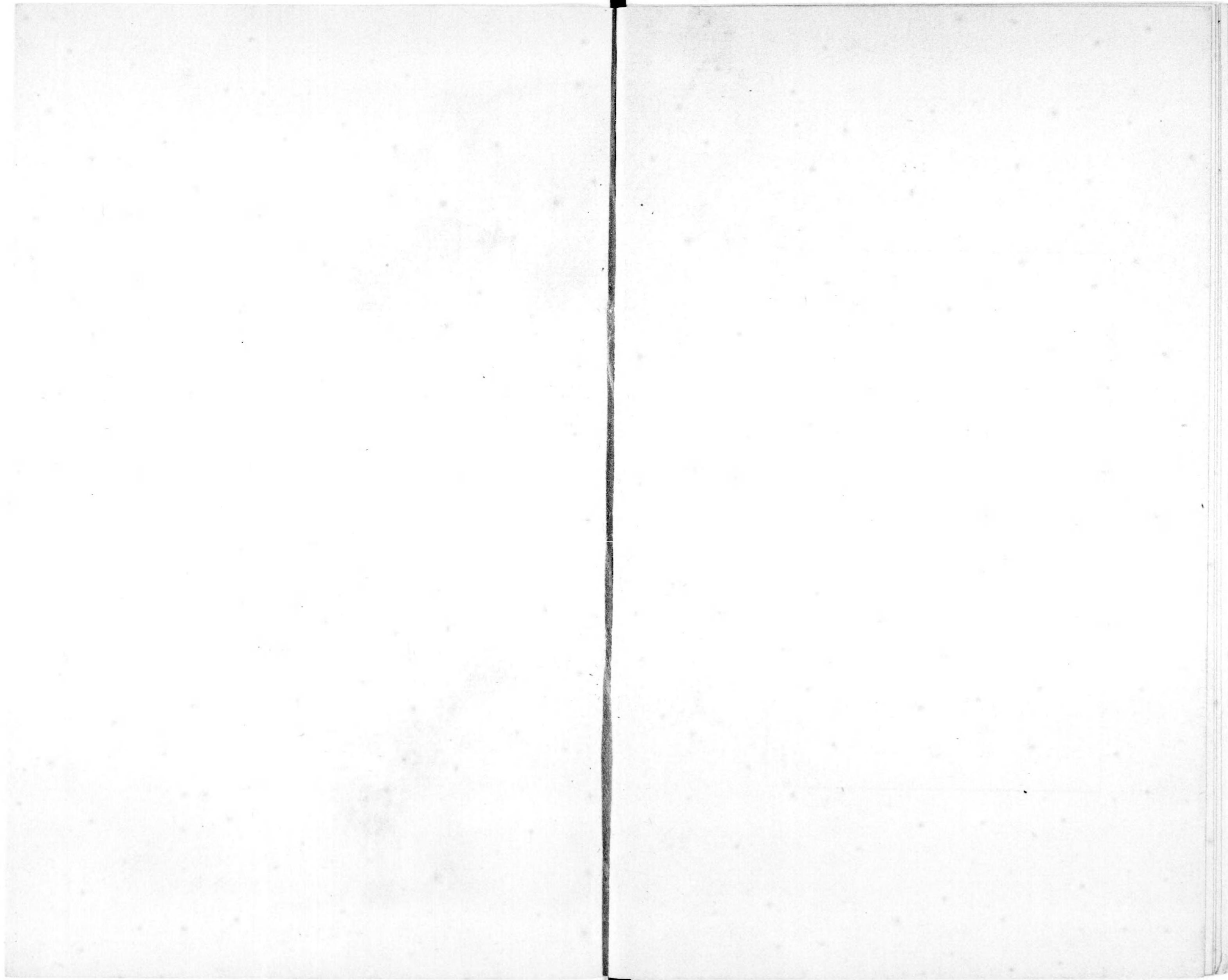
印刷所 精藝出版合資會社印刷部

發行所

東京市牛込區  
神樂町一ノ二

曙光詩社

振替口座東京三七七七二 電話番町七二三



177  
642





終

